主論文の要約

論文題目： 改革開放期の中国における学力観の変化に関する研究
—高等学校歴史科を例として

氏名：秦　東興

本研究では、1970 年代末以降の改革開放期における中国の学力観の変化を考察する。1970 年代末以降の社会改革に伴って、中国の教育目的、理念は変化している。その変化過程を明らかにすることは、中国教育の改革、発展の方向を把握する点で有益だと考えられる。

中国では、日本の「学力」、「学力観」に相当する語彙がない。だが、学力の意味を含めた研究は行われている。例えば、「知識」、「能力」、「意欲」などの学力に含められる部分に関する研究が多い。小中高校の教学大綱·課程標準には、「知識」、「能力」、「情感・態度・価値観」という 3 つの側面の育成目標が規定されており、それは日本の広義の学力観に対応するものだと考えられる。そのため、本研究では、広義の学力観の視点から、中国の学力観の変化を考察する。

本研究では、高等学校の歴史科を例として学力観の変化を探究する。高等学校の教育は、人材育成の重要な段階として中国の教育理念を鮮明に表している。また、歴史科は他の科目に比べると、社会情勢の変化をより敏感に反映すると考えられる。その点で、本研究では高等学校歴史科を例として、学力観に焦点を当て、中国改革開放期における教育改革、発展の過程を明らかにする。

本研究では、高等学校歴史科のカリキュラム改革、およびその中に現れた知識、能力、情感・態度・価値観の育成目標の転換を分析し、学力観の変化を検討する。カリキュラム改革は基本的に、教学大綱·課程標準の改訂、それに基づく教科書の改訂、大学入試の改革という手順で進められる。本研究では教学大綱·課程標準の改訂によって、改革開放期のカリキュラム改革過程を「第Ⅰ期：1970 年代末—1990 年代初め」、「第Ⅱ期：1990 年代半ば—2000 年代初め」、「第Ⅲ期：2000 年代初め—現在」の 3 つの時期に分け、歴史科の教学大綱・課程標準、教科書、大学入試問題の分析を通して、学力観の全体的な変化および各時期の学力観の特徴について考察する。さらに、教育現場の教師と生徒に対するインタビューを通して、その学力観と生徒の学力実態の関係を明らかにする。

第 1 章

1970 年代末から 1990 年代初めまで、中国の社会では文革期のイデオロギーを取り除くことが目指されていた。だが、1980 年代初めまでの華国鋒体制のもとで、リーダー崇拝、階級闘争などの文革期のイデオロギーはまだ強く残存していた。1980 年代半ば、鄧小平が唱導した改革開放政策が徐々に進められ、文革期のイデオロギーは明らかに取り除かれた。

しかし、1989 年の「天安門事件」によって、改革開放路線にブレーキがかかり、「和平演変」を警戒すべきとする保守派の発言力が強まり、右傾化の傾向が強くなった。この時期の社会情勢は、全体的に見れば政治中心という傾向が強い。1985 年の「中共中央が教育体制改革に関する決定」によって、文革期のイデオロギーを取り除き、文革によって欠落した青少年の基礎的な知識、基本的な技能を強化することが目指された。一方、青少年の政治性教育が強化され、社会主義・共産主義の継続人を育成することが強調された。

この時期の社会情勢と教育理念は、高等学校歴史科のカリキュラム改革に影響を与えた。全体的に見れば、Ⅰ期の教学大綱に規定されている内容には、歴史科の基礎的な知識、および「共産党熱愛」、「革命伝統の教育を実施する」などの政治思想の育成を目指すものが見られる。教科書のスタイルと内容には、基礎的な知識の習得と政治思想の育成に有利するように設計されたものが見られる。入試問題のスタイルには、基礎的知識の考査を中心に、教科書内容によって出題される総体的な傾向が現れている。入試問題の内容には、政治史、とりわけ革命･暴動･戦争に関する内容は重点的に出題されるという総体的な特徴が見られた。

第２章

1992 年初めの鄧小平「南巡講話」、および同年 10 月の中国共産党 14 大の開催を経て、中国社会活動の中心は経済発展に置かれた。とりわけ、「中国の特色ある社会主義を建設する」という鄧小平理論の確立によって、社会主義体制のもとで市場経済を導入することが認められた。それによって、社会主義現代国家の建設に力を尽くす人材を育成することが重視された。また、政治経済体制の改革に対応した教育改革も行われた。1993 年に、国家教育委員会が発布した「中国教育改革と発展綱要」には、政経済体制に適応する教育体制を立て、さらに、基礎的な知識、基本的な技能の習得を強調する受験教育から、児童・生徒の総合的な資質、とりわけ知識を活用する能力の育成を重視する「素質教育」へと転換することが示された。それ以降、「素質教育」は中国教育改革の中心的な理念になった。

この時期の社会情勢と教育理念は、高等学校歴史科のカリキュラム改革に現れ、学力観の変化に影響を与えた。第Ⅱ期の高等学校歴史教学大綱に規定されている内容を見れば、歴史知識を利用して分析、概括、思考、問題解決などの能力の育成が重視されたことがわかった。情感態度価値観の育成という視点から見ると、「改革開放の意識」、「中国の特色ある社会主義を建設する信念（決心）」という経済発展に力を尽くす覚悟の育成が強調された。教科書のスタイルは、生徒の学習意欲を促進し、能力育成を強化するように設計されてきた。教科書の内容には、歴史時期を単位に書かれたこと；経済史内容の増加；社会改革に関する内容を重点に；歴史事件を客観的に評価することなどの特徴が見られた。また、大学入試問題を見れば、知識を活用して問題を分析解決能力の考査に関する問題が増加し、総合的に出題し、難易度が増加するなどの傾向が現れた。問題内容には、歴史事件の発展過程と規律の考査の重視；文化史に関する問題の追加；新中国建国以降の歴史に関する問

題の増加という状況が見られる。つまり、第Ⅱ期の学力観は、知識を活用して問題を解決する能力､改革開放･社会主義現代化建設に力を尽くす意識の育成を重視するものである。

第３章

21 世紀に入って以降、世界経済、文化、情報のグローバル化が広範に進行した。とりわけ、文化の衝突、競争、融合という側面に大きな感心が寄せられるようになった。自国、自民族のアイデンティティに加えて、多文化の理解と尊重、国際主義の加速発展を経て、国民の物質生活が大きく向上したものの、社会各方面の不平等･格差、環境汚染などの問題が徐々に顕在化してきた。2002 年に当選し、中国最高指導部のリーダーとなった胡錦濤総書記は「和諧社会」、「科学的発展観」という指導理念を発表した。全体的な発展のもとで、個々の利益、人間性の尊重も考慮されるようになった。この時期の教育改革は、素質教育理念の深化が目指され、「2003―2007 年教育振興行動計画」、「国家長期科学技術発展計画綱要（2006―2020 年）」、「科技計画綱要を実施し、自主革新能力を強化することに関する決定」が相次いで公布された。青少年学生の革新力、実践能力を育成することは注目されてきた。

2003 年以降の高等歴史カリキュラム改革には、この時期の社会情勢と教育理念の影響が現れた。2003 年の課程標準には、実践能力、革新能力、協力学習・探究能力の育成、及びヒューマニズム精神、多元文化の理解と尊重、健全な人格の養成に関する内容が追加された。それに基づいて、教科書のスタイルと内容には、生徒の学習意欲を促進し、独自思考、実践、協力探究の能力を向上させ、国際意識を形成させ、ヒューマニズム精神、健全な人格を養成するように編集されてきた。大学入試問題のスタイルと内容には、生徒の自ら思考、分析、問題解決能力の考査を重視し、多文化の理解と尊重、中外関連の国際意識の形成が考慮されたことがわかった。つまり、第Ⅲ期には、生徒の実践と革新能力、学習意欲、健全な人格の養成を目指す学力観が窺える。

第４章

上述のように、改革開放期における国家の学力観の変化を考察した。また、本研究では教師と生徒に対するインタビュー調査を通して、教育現場の歴史教学と生徒の学力実態、およびそれと国家の学力観のずれも明らかにした。

1、能力育成について

改革開放期における歴史科の能力育成目標は、(1) 第Ⅰ期における歴史唯物論の基本的な観点､歴史唯物論の基本的な観点を利用して､問題を観察し分析する能力の育成から；(2) 第Ⅱ期における歴史を認識する分析、総合、帰納、比較、概括などの方法を身につけさせ、史料を読み、理解し、分析する能力の育成まで；(3) 第Ⅲ期における革新力、実践力、協力学習・探究能力の育成へと転換している。しかし、第Ⅰ期と第Ⅱ期の歴史教授には、授業と教科書の内容を生徒に詰め込むことが重視され、教師・教科書中心であった。生徒の

学力実態は、明らかな転換は見られておらず、分析概括、問題解決、独自思考などの能力がすべて非常に低いレベルに止まっていた。それに対して、第Ⅲ期の歴史教授には、知識を活用する能力、とりわけ実践、探究、協力学習、自ら思考の能力の育成が重視されることになった。生徒の自らの分析、思考、判断などの能力も向上した。したがって、第Ⅱ期においては学力観と教育現場の歴史教学、生徒の学力実態とのずれが見られた。それは、教育現場の歴史教学と生徒の学力実態が大学入試の強い影響を受けているからである。第Ⅰ期からⅡ期までの大学入試は、知識の考査を中心に、教科書内容から直接的に出題される形式は、根本的に変わっておらず、そのため、教育現場の歴史教学、生徒の学力実態にも明らかな変化が現れていなかった。

2、情感・態度・価値観の形成について

教学大綱・課程標準、教科書、大学入試問題の分析を通して、生徒の愛国情感、国際・世界意識、個人人格の形成に関する育成目標の変化が見られる。(1) 第Ⅰ期には共産主義・社会主義と共産党の熱愛という情感、共産主義・社会主義事業に献身するという価値観の形成；(2) 第Ⅱ期には社会主義祖国の熱愛という情感、改革開放と社会主義現代化建設に力を尽くす価値観、世界競争に参与する国際意識、健全な人格の形成；(3) 第Ⅲ期には愛国主義情感、人類平和と進歩事業のために貢献する価値観、多文化の理解・尊重という国際精神、健全な人格の形成へと転換してきた。それは、愛国情感、国際意識・世界意識、個人人格という三つの面から分析される。国家の育成目標の変化と、生徒の情感・態度・価値観の変化のずれが見られる。

まず、生徒の愛国情感は、三つの時期は明らかな違いは見られない。歴史科の教授と学習を通して、生徒の愛国情感・民族誇りの形成が促進されていた。次に、世界意識･国際意識という視点を見れば、Ⅰ期とⅡ期の生徒は外国・世界を深く考えることはなく、世界意識･国際意識は育成されたとは言えない。それに対して、第Ⅲ期には世界と中国を関連付けて考え、さらに外国の政治、経済、科学技術、文化などを客観的に認識する生徒が増えてきたと思われる。生徒の世界意識･国際意識が初歩的に形成されたと言える。また、生徒の個人人格の養成を見れば、Ⅰ期とⅡ期の生徒の人格形成には明らかな違いが見られず、基本的に革命暴動の指導者、業績を作った帝王、プラス面の政治人物の尊敬を基本とする。それに対して、第Ⅲ期の生徒では尊敬する人物が多様になり、マイナス面の人物、論議されている人物も含まれるようになった。つまり、Ⅱ期とⅢ期の情感・態度・価値観の育成目標が近いことに対して、Ⅰ期とⅡ期の生徒の情感・態度・価値観の実態は一層近いものであり、学力観と教育現場の学力実態とのずれが見られた。